



生誕180周年

NHK 大河ドラマ「青天を衝け」放送記念

# 「時代の革新者 渋沢栄一の半生」

## 第4回：一橋家・京都編

ぶぎん地域経済研究所 取締役 研究主幹 松本 博之  
(公益財団法人 渋沢栄一記念財団維持会員)

栄一は、「私は生涯に5回も人生の目的を変えた。」と晩年に語っている。以下がその人生の目的を変えることになった転機である。

- ①サムライを志して家を出た
- ②一橋家に仕官した
- ③徳川昭武と欧州留学をした
- ④静岡で商工会社を起こした
- ⑤新政府の官僚になった

さて連載4回目となる本稿の舞台は京の都が中心となる。やむにやまれぬ事情で血洗島村（現深谷市）を離れ、京都へ行き一橋家に仕官した栄一であった。

### 13 名前を栄一改め篤太夫とする

一橋公への拝謁も無事終わって、初めて出仕したのは1864（元治元）年2月12日のことである。出仕に合わせて、栄一は篤太夫、喜作は成一郎と名前を変えた\*。身分は奥口番と、最も身分の低い役で4石2人扶持で他に京都滞在中の手当として月4両1分が支給された。ただ実際の仕事はというと御用談所、一橋家の交際や接待を担当する部局で、平岡四郎の秘書的な役目を仰せつかった。

住居は御用談所の脇の部屋を借りた。8畳2間に台所の長屋住まいのような部屋で、喜作と自炊生活を始めた。二人で三枚の布団に背中合わせで寝ていたという。父からもらった100両の金も、江戸や伊勢神宮参拝、京都での2か月に及ぶ旅籠代金ですべて使い果たしてしまった。逆に友人らから借りた借金が合計で25両にも膨らんでいた。そこで二人は質素儉約に努め、支給された京都滞在中の手当に手を付けず、程なく借金を返済した。また彼らの仕事ぶりは、平岡の目に叶うものであった。4月には御徒士として、奥口番よりも一つ上の職種となり、食禄は8石2人扶持で、京都滞在中の手当は月6両になった。

### 14 人材発掘のため関東へ — 恩人平岡の暗殺死に衝撃

ここから、栄一の一橋家での“建白魔”としての活躍の話を紹介する。栄一は仕官当初から、「当家は広く天下の志士を召し抱えるべきです。関東の友人に相当な人物がいるから、人選に自分と喜作を関東へ派遣して欲しい」と平岡に進言していた。これには、一橋家に仕える以上、できるだけ多くの同志を入れておきたいという栄一の思惑

\*本稿では栄一、喜作をそのまま使う

もあった。また関東に行くことについては、長七郎を何とか幽閉から救いたいと、そのための手立てを探ろうという目的もあったが、実際問題としては、なかなか難しかった。

同年5月末～6月初旬の栄一らの関東派遣が決まる。一橋領内を一回りすると小禄でも良いから仕官したいという者もあり、領内で40人、その他江戸で剣術に優れたもの、漢学生など10人、合計で50人を“スカウト”することができた。

無事に任務を果たす一方で、京都では6月17日の夜、頼みとしていた平岡四郎が水戸藩士に一橋邸の傍らで暗殺されたとの知らせが届いたのである。一橋家の出仕には大変世話になった恩人であり、杖とも柱とも考えていた平岡の死は、栄一や喜助にとって大きな失望をもたらした。

京都への帰り道は中山道を通ってもどることにした。故郷、血洗島村へ寄って、父母や妻子にも逢いたいと思っていたからだ。しかしそのために

は、旧領主の陣屋がある岡部を通らなければならない。家族たちに江戸に出て来てもらおうとも考えたが、叶わなかった。そこで故郷へ寄ることをやめて、熊谷宿近くの妻沼（現熊谷市）で父と密かに再会し、その後深谷宿で1泊した際に、妻と2歳の長女と会うことができた。

この関東での功績が評価され、1865（慶応元）年1月には小十人並という身分になり、御用相談所下役から下役が取れて、御用相談所出役へ。1年ばかりで二つ昇格した。食禄は17石5人扶持、京都滞在手当ては13両2分で昇給する。御目見え以上となり、一橋公に対して直接物が言える立場になった。

一橋家は8代将軍吉宗によって創られた「御三卿」の一つである。幕府から\*十萬石ほどが支給され、主な存在目的は将軍家の血筋を絶やさないことだった。人員も幕府からの“出向”する形であったため、古いしがらみの薄い家柄であった。そのためか、平岡が栄一らを仕官に誘ったように、出自に関係なく有能な人材を求めていた。これが幸いして、農民上りでも能力さえあれば活躍ができたという事情もあった。

## 15 軍備増強も提言、兵力強化のため播州へ

“元武闘派”の栄一からすれば一橋家の兵力の弱さが大いに気になるところであった。そこで一橋公へ兵力増強を意見具申するに至った。一橋公が務める禁裏守衛総督という大任には、現在ある微弱な兵力では、到底十分とは言えない。御守衛は有名無実になってしまうため、二小隊や三小隊では不十分である、また彼らは幕府からの派遣であるので、幕府の都合でどうなるかわからないというのが栄一の考えだった。そこで栄一は、一橋家

\*備中（岡山県）に3万2～3千石、  
播磨（兵庫県西部）に2万石、  
摂津（大阪府北西部から兵庫県南東部）に1万5千石、  
和泉（大阪府南部）に7～8千石、  
その他現在の関東地方に2万石で合計10万石

深谷市内にある栄一の銅像①（生家中ノ家）





領内の農民を 1,000 人ほど集めて、訓練して組織したら、金をかけなくても二大隊が常備できると考え、一橋公に直接意見具申したのだった。そしてその役を自ら申し出て、1865(慶応元)年2月末、「歩兵取立御用掛」を拝命した。一橋家の領地である備中、播磨、摂津、和泉の4国を巡回し、兵を集めることとなった。

### 兵力集めに苦勞する

栄一にしてみれば、自身も農民から出仕した一人であるので、少し勧誘すれば簡単に集まると考えていた節がある。まず備中で、農家の三男坊などを、一橋家の兵隊としてくわえるべく、徴兵に出かけた。備中を始めに領内の各代官所へ京都の勘定所から歩兵取立御用掛の渋沢篤太夫が行くので、全て同人の指図に従って兵を募集すべしとの連絡を事前に発していた。備中に着くと、庄屋たち出揃っての丁重な出迎えを得た。

翌日、代官に面会、庄屋たち領内の二男、三男で希望者を速やかに連れて来るように伝えたが、一人として応募がなかった。そこでさらに言葉を丁寧の説明したが、依然として応募者は現れなかった。「これは、何かおかしい？」と疑念を深めた栄一は、気長に考えれば良い策が見つかるだろうと思ひ、募集の呼び出しを中断して、村民たちの信頼を得る方法はないかと考えた。事情を探ると、農民とは言え、読書や剣術も盛んであることがわかり、庄屋に再度、情報収集を実施した。そこで村内に塾を開いていて村民の尊敬を得ている儒学者(阪谷希八郎先生)がいることがわかり、塾に出向き、阪谷先生や塾生たちと議論し、宴席を設け交流した。その後剣術指南と手合わせをし、栄一はこの指南を易々と打ち負かしたのであった。こうして1週間ほどすると、一つの村から二人、



深谷市内にある栄一の銅像②(深谷市役所庁舎内ロビー)

別の村から三人と応募者が来るようになった。

そこで再度、庄屋たちを集めて聞いたですと庄屋たちから意外な話が出てきたのであった。原因は代官だったのである。代官から各庄屋へ、「一橋家にも、最近は山師のような家来が多くなった。彼らは思いつきで、村々へ面倒なことを言いに来る。今回の兵の募集についても一人も志願する必要はない。」と言っていることが分かった。

そこで栄一は、「拙者はいやしくも係る重大な御用で、当地まで出張しているからには、できない場合はその理由を明らかにしなければならない。また私の辞職だけでは事が済まないだろう。その時には皆(代官たち)にも迷惑がかかる場合がある。」と代官を問い詰め、震え上がった代官は協力を約束した。

翌日からは、続々と応募者が訪れ、300人ほどが集まってきたのであった。その他の地域では、既に大阪の代官所から通知が回っていたので、瞬く間に用事が済んだ。合計で456人を集めることができた。翌年の春までに京都へ集まるようにして、訓練を重ねた結果、7～8月には兵力も形作られてきた。こうして洋式訓練をした農兵部隊は、一橋家の歩兵部隊となった。

深谷市内にある栄一の銅像③（浜沢栄一記念館）



## 16 財政改革、産業発展へ三つの建白

次に栄一の藩が財政充実のため提言した施策と、実際に彼が取り組んだ内容を紹介する。栄一は、1865（慶応元）年8月、一橋家の財政充実のため以下に紹介する3事業案を提言し、全てが取り上げられた。そして直後となる同年秋から自らが提言した三つの事業を開始するために、兵庫（現在の神戸市）、大阪、備中そして播磨に長期出張を行なった。翌1866（慶応2）年春に3事業ともに成功させて京都へ戻る。

この成功によって、その年の秋に栄一は食禄25石7人扶持、京都滞在手当も月給21両となり勘定組頭並を拝命し、御用談所役も兼任ということになった。一橋家では、トップは勘定奉行が二名（実はお飾り）で、実務面は勘定組頭の三名が取り仕切っていた。たった2年で栄一は、100名以上の大集団の実質的な舵取りを任せられるようになった。異例の大出世と言っても良いだろう。

以下、その三つの事業を説明する、

### ■ 米の自主流通を始める

一橋家の所領である播磨や摂津は、質の良い米が大量に収穫できる場所であったが、しかしながら播州から収納する年貢米を兵庫で捌いている実態だった。兵庫の蔵方にまかせっきりで、代官の注意が届かないことに、米が低い値段で取引され、利益を生んでいない状況であることを栄一は指摘したのである。

播磨と摂津の年貢米はわずか1万石だったが、もう少し高く売れば、すぐに5,000両くらいの利益につながると栄一は踏んでいた。そこで兵庫で売り捌いていた播州米を、灘や西宮の酒造家に直接取引するルートを開いた。中間マージンを取り除くことで、高収益な体質に改善させていった。

### ■ 木綿の売買を円滑にする

同じく播磨でできる白木綿もかなりの産額であった。播磨の特産物と言っても良い産物であるが、これを農民が大阪で売っており、売買に一橋家が全く関与できていないという実情について、これを何とかすべきと提言した。

一橋領地の各郡から白木綿を一橋家が運営する特産物会所で取りまとめて、大阪の指定問屋で販売させる。その売上金は大阪の豪商など確実にところに預けて利息を得る。農民には納めた白木綿と引き換えに「御産物木綿手形」という藩札を発行した。藩札は農民の申し出により正金と引き換える仕組みをとった。藩札と現金での交換期限までの時間差を利用して資産の増加を図った。

当時の藩札は多くが正金への引き換え条件が悪いため、取引が不自由だった。そこで栄一は、引き換え元金を十分に用意して、他に流用できない

ように基礎を固めたうえで発行した。何の弊害も無く、いつでも正金と同額で換金できるようにしたため、便利に使われたという。

#### ■ 硝石製造所の設立

領内の備中で産出される\*硝石<sup>しょうせき</sup>（硝酸カリウム）にも目を付けたのが栄一である。これを製造して「販売するべきだ。」と提言した。そこで藩内に4か所、硝石製造所を作った。

## 17 一橋公の将軍職へ猛反対

一橋家家臣として、次第に自分の意見を取り上げていただく機会も増えて、栄一としては、献身的にご奉公しようと思っていた矢先に、困った問題が発生した。

1865(慶應2)年7月20日、第14代将軍家茂が21歳の若さで逝去、長州征伐が取りやめとなった。何たる運命のいたずらか、一橋公が、徳川一門宗家を相続して第15代将軍になるという話が持ち上がった。ここで、栄一と喜作は、「相続はな

んとしても拒否するべきだ」と猛反対を展開するのだった。

ちなみに栄一の考えの主な内容は、以下の通りである。

～私は、一橋家に禄を食んでいるが、依然として徳川幕府は倒してしまわなければならぬもので、また天下の体勢から察しても当然倒れるべきものと考えている。主君として仕えた一橋公が将軍になることは、情誼の上からしても、幕府を倒すというわけにいかなくなってしまう。幕府の屋台骨は腐りきっており、一橋公が将軍になったとしても、幕府は早晚倒れる運命にあると信じている。大黒柱を一本交換しても意味のない。いくら一橋公が賢く有能であっても、お一人では何もできない。相続はなんとしてもやめさせなければならない。死地に行くのと同じだ。～

当時の用人、原市之進も栄一の考えを十分理解していたので、「それまで思うなら、直接、意見を具申したらどうか」ということで拝謁の機会を作ってくれた。しかしながら、一橋公は面談を約束した日に大阪へ行ってしまったのである。



深谷市内にある栄一の銅像④ (JR 深谷駅前 青洲広場)

\*硝石＝硝酸カリウムが天然に産出する形態が硝石となる。染料や肥料などの窒素が必要な製品原料として、また黒色火薬の製造に必須の火薬材料として使われた。



栄一の失望落胆はこの上なく、「もはや大事なことは去ってしまった。このうえはどうしたらよいだろうか。元通りの浪人になろうか。しかし浪人になっても行く当てはない。だからと言って長くこうしては、いられない。すでに一橋家に仕官して3年も生き延びたから、これからまた死に場所の算段を巡らそう。一橋公も今の段階で將軍職を相続されるようでは、もはや望みもない。賢明などと言っても、もはや大名は大名だから仕方ない。つまり、われわれの進言が実行されない以上は、やむを得ず去るしかない」と考えたのである。

#### 一橋公への義理と自分の信念との板挟み

栄一にとって、一橋公が徳川幕府の將軍となったことよりも、その結果、自分が幕臣になってしまったことへの失望落胆は大きかった。不平不満は筆舌に尽くせないもので、幕臣となった自分自身を許すことができず、毎日、切腹を考える日が続いた。

大変な失望から、まったく仕事が手につかない状態で、朝早くに出勤しないで、書物でも読んで昔の

英雄豪傑を友としてホラをふいているというふうになった。これまでの人生での努力が、みな水泡に帰してしまったことには、栄一にとってとても遺憾なことであった。また栄一も喜作も、一橋公の將軍就任に伴って、陸軍奉行支配調役というお目見え以下の身分になってしまい、直接に話ができなくなったことも、大いに不満となっていた。

やや長いが青淵回顧録より当時の栄一の心の内を垣間見ると、「一橋公が將軍になられて、私はこれほど困ったことはない。従来から倒そうと心掛けてきた幕府である。倒幕のため努力奔走する情誼上憚らなければならない。一時は切腹して果てようか、と思いつめた。」とある。

さて、実際の栄一はどう決断したのであろうか？幕臣を辞して浪人になろうか、切腹して果てようかとまで思い悩んだ末、現実的な道をたどることになる。恥辱や苦痛を忍んで、機会が来るまで待ち、暫く忍従して幕府へ仕えるという道を選んだ。与えられた陸軍奉行支配調役として勤めることに気持ちを切り替えたのである。そこへ思わぬ話が舞い込んでくるのだった。

#### ■栄一、西郷隆盛と豚肉鍋を食す

一橋家の家臣として京都を舞台に活躍した栄一であったが、彼の仕事の一つに雄藩の動きを探る諜報活動もあった。対象は薩摩藩で、内偵の目的で西郷隆盛が京都在番の時に時々西郷を訪問した。

西郷は下僕一人と一緒に相国寺に住んでいた。幕政批判、新しい政治体制などについて、栄一と西郷は同じような考えを持ち合わせていたためか、意気投合したようだ。西郷は栄一に対して、「幕府の制度も、今のように重要

な職を大名が世襲する老中制度では、とうてい政治を円滑に行っていくことができない。ぜひとも諸藩の人材を集めて国政の改革を断行するようにしなければならぬ。それについては、一橋公は徳川一族のなかでも最もすぐれた人材であるから、是非にその仲間に入って雄藩会盟の中心となるようであればならぬ。」と言い、栄一が「そんなら西郷さん、あなたがその中心人物になられてはいかがですか？」と切り返すと、「いや、それはいかん。天下のことというものは、そう簡単に行くものではない。なかなか難しいもの

だから、すべて物事は順序をへなければならぬ」と西郷が答えたことと記録している。

意気投合した二人は栄一が西郷を訪れる（実は内偵？）その都度、豚鍋をつつきながら議論に花が咲いた。二人の関係は明治維新後も続き、大蔵省の役人であった栄一宅へ西郷が政策への意見を聞くため、一人で突然訪問したことがあり、非常に驚いたと書いている。



余談だが、栄一が幕府が倒れた後の見通しについて語った資料が残っている。「幕府が倒れたのちに、今のような新政府ができるとは夢にも思わなかった。朝廷には武力が無かったので、幕府が倒れた後は、雄藩の豪族政治になると考えていた。その雄藩の豪族政治に徳川一門から加わることができるのは、その能力からいって慶喜公しかいない。慶喜公を押し立てて、豪族政治に割り込めば、慶喜公を通じて自分の考える政治が実現できるのではないか……」と踏んでいた。

公武合体が成されて、その一角に一橋公が入る新しい政体ができるものと考えていたようだが、結果として、それは外れてしまった。

## 18 突然の呼び出し、いざパリへ

11月29日悶々として過ごす栄一のもとへ、用人の原市之進から呼び出しがあった。話はと言うと、翌、1867(慶応3)年のパリ万博親善使節の代表となる慶喜の弟、清水家の昭武(14歳)の御世話係として随行しろという話だった。また万博の式典に参加して、各国歴訪の公式行事の終了後には、個人的な留学が予定されており、昭武の個人留学(5~7年程度)の部分のサポート役回りも期待されていたのである。「篤太夫ならば、人間も確りしているし、将来に望みのある男であるから、彼のために海外に遊学させるのは良いだろう。水戸藩から随行する7人の中に庶務会計をできるような人物はいない。彼なら適任である。」という慶喜の栄一を選抜した言葉である。

栄一は「快諾」をする。その理由について栄一は、「私は初め攘夷論者だった男だが、情勢はいつまでも鎖国主義を取ることは不可能であると考えていた。機会があれば西洋の事情を知りたいと思って

いた。そこで意を決して、お受けした。嬉しさは、何とも例えることができなかった。」と語っている。

その後の人生への最大のエポックメイキングとなったであろう、パリ万博への洋行は、次回に紹介する。

### NHK大河ドラマ 青天を衝け

### 出演者〈第一弾〉決定する！

主人公 渋沢栄一	吉沢 亮
栄一の従妹/のちの妻 千代	橋本 愛
栄一の父 渋沢市郎右衛門	小林 薫
栄一の母 渋沢い	和久井映見
栄一の姉 渋沢なか	村川 絵梨
栄一の妹 渋沢てい	藤野 涼子
栄一の従兄(栄一の人生の師) 尾高惇忠	田辺 誠一
栄一の従兄 尾高長七郎	満島真之介
栄一の従弟 尾高平九郎	岡田 健史
栄一の従兄 渋沢喜作	高良 健吾
栄一の伯父 渋沢宗助	平泉 成
栄一の伯母 渋沢まさ	朝加真由美
徳川(一橋)慶喜	草薙 剛
徳川斉昭(慶喜の父)	竹中 直人
平岡円四郎 (慶喜の側近にて恩人)	堤 真一
円四郎の妻	木村 佳乃
水戸家 藤田東湖	渡辺いっけい
" 武田耕雲斎	津田 寛治
幕府 勘定奉行 川路聖謨	平田 満
砲術家 高島秋帆	玉木 宏

放送開始は  
2021年  
2月14日(日)  
より!